

岡山県高梁市宇治町の運営方針の変更

野 邊 政 雄

Changes in Administrative Policy Affecting Residents:
The Uji Area of Takahashi City, Japan

Masao NOBE

ビジネス心理学科、心理学部、
安田女子大学

要 旨

岡山県高梁市宇治町では、地域の運営方針が2015年に変更された。本稿では、その運営方針の変更を説明するとともに、住民の助け合いの事例を提示する。主要な論点は、次の2点である。第1に、宇治地域まちづくり推進委員会は、地域の運営方針を次のように変更した。1990年代から、同町は都市との交流活動を中心に、地域振興をしてきた。ところが、過疎化や高齢化が更に進行したので、まちづくり推進委員会は宇治町の運営方針を2015年に変更した。そして、今後取り組むべき地域の重点課題を、①既存事業を見直し、住民の負担を減らす、②移住者を積極的に受け入れる、③現在住んでいる住民が安心して暮らせる仕組みを構築する、の3点とした。第2は、「家」意識についてである。1995年当時、高齢者は「家」意識を持っており、多くの高齢者（夫婦）は子ども夫婦と同居していた。ところが、現在、高齢者は「家」意識を持っておらず、子ども夫婦と同居する高齢者（夫婦）は格段に少なくなった。そこで、住民が助け合って、安心して暮らせる仕組みを構築することが重要となっている。

キーワード：地域の運営方針、既存事業の見直し、移住者、住民の助け合い、「家」意識

1. 本稿の目的

高梁市は岡山県の西部の内陸にある市である。高梁川が高梁市の北から南へ流れている。高梁市の大部分は、300メートルから500メートルの比較的平坦な高原（吉備高原）である。高梁市宇治町と松原町は高梁川の西側の高原にあり、隣り合っている。宇治町は松原町の西にある。筆者は2016年から2017年にかけて両町で高齢女性を対象に調査を実施した。この調査を実施するために、両町に住む多くの住民と話したり、両町についての文献を調べたりした。この中で、宇治地域まちづくり推進委員会が宇治町の運営方針を2015年に変更したことが分かった。本稿では、宇治町の運営方針の変更を説明し、宇治町を暮らしやすい地域とするために住民がおこなっている助け合いの事例を提示する。

2. 宇治町の地理と歴史

2.1 地理

高梁市宇治町はもともと宇治村という地方自治体であった。1954年に、高梁町、宇治村、松原村など1町8村が合併して市制施行し、高梁市となった。宇治町は、穴田、宇治、遠原、本郷という4つの大字からなっている。松原町と比べて、宇治町は平坦である。宇治町宇治は吉備高原の中にあつて比較的広い平地であり(写真1を参照)、宇治町の中心地となっている。ここに、宇治公民館(宇治地域市民センター)、駐在所、宇治幼稚園、宇治小学校、市立宇治高校、宇治郵便局がある。市民センターでは、高梁市役所の窓口業務をしている。宇治幼稚園に入園を希望する子どもが3名以下となり、2020年4月から同園は休園となった。宇治小学校の生徒も11名となってしまった。



写真1 宇治町宇治

2.2 歴史

高度経済成長が始まった1955年当時、宇治町の人口は2,434人であった(表1を参照)。住民が多かったこともあって、宇治町宇治にはいろいろな商店があった。写真2は、宇治町宇治にかつてあった商店の案内地図である。この案内地図は県道85号線の元仲田邸くらやしき(宿泊施設)近くの道路脇にある。2017年5月に写真を撮影した。案内地図から、雑貨店、文具店、自転車店、畳屋、酒造所、製麺所、新聞配達所などがかつてあったことが分かる。食料品店、酒屋、製

表1 宇治町の人口と世帯数の推移

年	人口		世帯数 (単位:世帯)
	実数 (単位:人)	1955年を 基準とした 割合	
1955年	2,434	100%	
1960年	2,226	91.5%	
1965年	1,908	78.4%	391
1970年	1,637	67.3%	374
1975年	1,272	52.3%	341
1980年	1,141	46.9%	335
1985年	1,140	46.8%	336
1990年	1,048	43.1%	318
1995年	953	39.2%	297
2000年	876	36.0%	292
2005年	744	30.6%	275
2010年	655	26.9%	266
2015年	581	23.9%	248

(出典)国勢調査



写真2 宇治町宇治の商店の案内図

麵所、理髪店、住宅設備店など8軒の商店が元仲田邸くらしきの北側にあり、小さな商店街を形成していた。また、元仲田邸くらしきの北側の丘を少し上がったところに、市役所の出張所とその隣に民間の病院の診療所がかつてあった。医師が旧高梁町の病院から週に何回か来て診療にあたっていた。

高度経済成長期（1955-1973年）に人口が激減してゆき、1975年には1,272人となった（表1を参照）。宇治町の人口は高度経済成長期の約20年間に約半数となった。その後も人口減少は続き、2015年に人口は581人となった。このように、1975年から2015年までの40年間で、人口が更に半減した。ただし、世帯数は人口ほど急激に減少していない。2015年の世帯数は1965年の63.4%である。次に、65歳以上の高齢者の割合がどのように推移したかを見ると（表2を参照）、2015年に50%を超えて、51.4%となった。

人口が減少したこともあって、宇治町的生活関連施設が消失していった。1969年頃、診療所が閉所された¹⁾。その後、商店がだんだんと閉店していった。1990年に、駐車場の付いた大型ショッピングセンターが高梁市に2つできた。1つは旧高梁町（備中高梁駅周辺の地域）の備中高梁駅の近くであり、もう1つは落合町阿部の成羽川に沿ったところである。その頃までに、宇治町の多くの世帯は自動車を所有するようになっていた。宇治町の住民は自動車で大型ショッピングセンターに行き買い物ができるようになったので、地元の商店でいっそう買い物をしなくなった。そのため、商店の閉店は続いた。農協の事務所が宇治町宇治にあったが、これも2014年頃に閉鎖された。写真3は、元仲田邸くらしきの北側にあった小さな商店街であった道路の写真である。

2016年に写真を撮影した。現在、理髪店だけが時々営業している。宇治町にある商店は、宇治幼稚園の近くにある食料品店だけとなってしまった。元仲田邸くらしきの道を挟んだ南側に日本料理店があり、現在でも営業している。また、元仲田邸くらしきから東へ2キロほどの集落の中に美容院があり、これも営業している。

宇治町宇治には、もともと宇治中学校があった。しかし、生徒が減少したので、宇治市役所はその中学校を廃止して、他の地域の中学校と統合するという提案をした。当初、宇治町の住民は中学校の統合に反対する運動を活発に展開したが、中学校の廃止はやむなしと考えるようになった。そして、中学校を廃止する代わりに、市役所が中学校の跡地に公民館を新たに建設することを、住民は希望した。1989年（平成元年）に宇治中学校は廃校となり、1992年に公民館が完成した²⁾。

ホシ服装株式会社宇治工場という縫製工場が宇治町宇治の宇治幼稚園の近くにある（写真4）。宇治町に住む多くの高齢女性は若いときその縫製工場で働いていた。男性もボイラー係などと

表2 宇治町における高齢者の割合の推移

年	高齢者の割合
1990年	29.0%
1995年	36.8%
2000年	42.2%
2005年	48.0%
2010年	48.7%
2015年	51.4%

（出典）国勢調査



写真3 かつての商店街

て工場に勤務していた。最盛期には、100人以上が工場で働いており、この縫製工場は宇治町の既婚女性に多くの就業機会を提供していた³⁾。ところが、日本の労働者の賃金が上昇するようになったので、衣料品を製造する企業は賃金の安い海外で服を製造するようになり、1990年頃（昭和時代の終わり頃）までに国内の農山村にある多くの縫製工場は操業をやめた。宇治町宇治にある縫製工場は現在でも操業しているけれど、10人ほどしか働いていない。ほとんどの人は高齢女性である。中国で製造した衣服の不良品の直しや少量の



写真4 宇治町宇治の縫製工場

衣服の縫製をしている。こうした作業を中国の工場でおこなうと、国内の工場でおこなうよりも割高になってしまうので、こうした作業は宇治町の縫製工場でおこなっている。2017年に調査をしたとき、一部の高齢女性は縫製工場を退職後、その工場の縫製の仕事を自宅でしていた。

3. まちづくり推進委員会による事業の見直し

宇治地域まちづくり推進委員会は宇治地域の意思決定機関である。1996年に、宇治地域市民センター、コミュニティ推進協議会、各種35団体、および、町内会の代表者が集まってまちづくり推進委員会を組織した。まちづくり推進委員会は2015年に宇治町の運営方針を変更したが、その経緯について説明する。

1990年代はじめ、グリーン・ツーリズムの運動があったので、宇治町の住民の希望で、岡山県庁は4つのリゾート施設を宇治町住民のために建設・整備し、道路を改修した。1994年に、岡山県庁はもと庄屋であった家の邸宅を宿泊施設（元仲田邸くらやしき）として整備し、農村公園（都市住民と農業を通じて交流ができる施設）、備中塩田焼工房（陶芸体験のできる施設）、かんばら茶屋（地元で収穫した野菜などの特産品を販売する店舗⁴⁾）を建設した。また、県道85号線の道路の一部を改修した。そして、かんばらから遠原までの桜並木の道路約1キロは、かんばらフラワーロードと名づけられた。

住民はこうした施設を利用して都市との交流活動をおこなうことを中核にして、地域振興をしようとした。都市部の中高生の農業体験がその一例である。これは、都市の中高生が地元住民の家庭に滞在し、農業体験をするものである。また、都市に住む人々が宇治町に来て、農業公園でそば打ちをしたり、備中塩田焼工房で陶芸をしたりできるようにした。さらに、宇治ふるさと物産祭りなどの行事を毎年開催している。2001年からは、住民たちがお金を出しあって、宇治町宇治の西側の高台に桜の木を毎年植えて、たかうね桜の森公園として整備している。宇治町の住民はそうした施設を活用したり、行事を開催したりすることによって、都市の住民に宇治町へ来てもらおうと努めた。

そうしたさまざまな事業を実施したけれど、1990年代以降も過疎化や高齢化の進行は止まらなかった。その結果、地域で行事をおこなうためのマンパワーが不足するようになった。そこで、これまでの事業を見直し、将来取り組むべき重要課題を見つけることにした。

まず、宇治地域市民センターは各年代の有志に声をかけて、「宇治の明日を考える会」を組織した。同会が中心となり、宇治町住民へ住民意識調査を2012年に実施した。そして、同会は翌年に調査結果にもとづいて宇治町の将来について話し合い、結論を宇治地域まちづくり推進委員会に提言した。次に、まちづくり推進委員会は2015年に地域の問題の解決策を検討し、今後取り組むべき地域の重点課題を「既存事業の見直し（地域運営体制の見直しを含む）」、「移住者受け入れ体制の整備」、「高齢者等が安心して生活できる生活基盤の整備」の3つとした。そして、「宇治町を次世代につなぐために」という計画書を作成し、これにもとづいて宇治リスタート事業を開始した。

このことは、まちづくり推進委員会が宇治町の運営方針を次のように変更したということである。従来、宇治町の住民は外の人々に来てもらい、そうした人々のためにさまざまな行事をおこなうことによって、地域を賑やかにしたり、盛り上げたりしてきた。しかし、人口減少と高齢化が進行し、マンパワーが不足するようになったので、これまでのように行事をおこなうことが住民にとって負担となってきた。そこで、イベント等の行事を見直して、住民による行事の負担を減らすようにした。次に、宇治町の人口減少に対処するため、移住者の受け入れに積極的に取り組むことにした。さらに、現在住んでいる住民が安心して豊かに暮らせる仕組みを構築することにした。

重点課題を実現する宇治リスタート事業として、既存の行事の見直し、「全国雑煮サミット」や「宇治カフェ」の開催、電話帳の作成や防災キットの設置といったことをおこなった。具体的には、次のようなことである。

第1に、既存の行事を見直し、住民の負担を軽減するようにした。例えば、納涼祭では、かつては小学校のグラウンドで盆踊りをし、花火を打ち上げて花火見物をしていた。しかし、やぐらを組んで提灯をつるすのはたいへんな作業なので、盆踊りはやめた。そして、テーブルと椅子を道路に並べて、花火を見物するだけにした⁵⁾。行事の簡略化に加えて、小学校の行事と地域の行事を同じ日に開催にすることで、住民の負担を軽減した。

第2に、まちづくり推進委員会は移住者を積極的に受け入れることにし、受け入れ体制の整備をおこなった。これに関連して、「雑煮サミット」を開催した。これは、宇治町に移住してきた住民が出身地の雑煮を作り、地域住民をもてなす催しである。この催しで、移住者と地元住民が親睦をはかった。

第3に、毎週木曜日に宇治公民館で「宇治カフェ」を開くことによって、高齢者など住民が集い、交流する場を設けた。

第4に、電話帳の作成や防災キットの設置である。宇治町には30の町内があるが、町内ごとにアイウエオ順に世帯を並べた電話帳を作成し、全戸に配布した。町内によっては、携帯電話の番号も載せた。この電話帳は、災害時の連絡網とするためである。個人情報保護もあるが、情報を共有して生活や命を守るの方が重要であるという判断から、電話帳を作成した。また、緊急連絡先、かかりつけの病院、血液型などが書かれた紙が入っている缶である防災キットを冷蔵庫の中に保管してもらうようにした。万一のことがあったとき、警察や消防署の職員などが親戚縁者に速やかに連絡し、医療関係者が治療を円滑に実施するためである。

まちづくり推進委員会のこうした活動が評価され、宇治地域まちづくり推進委員会は2016年に過疎地域自立活動事例として総務大臣賞を受賞した。

4. 重点課題の達成を支援する団体や仕組み

移住者受け入れ体制の整備は宇治地域の重点課題の1つであったが、宇治町には移住支援団体として「住むか暮らす会」と「UIクラブ」がある。

「住むか暮らす会」は2010年に設立された。2020年現在、会員が15人いる。この会は市民センターと協力しながら、空き家の管理・紹介、引っ越しの手伝い、移住相談などを行っている。移住者は空き家を借りるか購入するかしないと、宇治町に定住できない。また、多くの移住者はぶどうを栽培する。移住希望者がいると、会の代表と市民センターの館長が移住希望者を面接し、移住希望者が宇治町の住民と協調して暮らしてゆけるかどうかを判断する。移住希望者を適格者であると判断したとき、その会は空き家やぶどう畑を移住希望者に紹介する⁶⁾。宇治町にはぶどう栽培の研修を受けることができる施設があった⁷⁾。ぶどう栽培を希望する移住者はその施設で研修を受けてから、自立していった。これまでに17世帯、40人が宇治町へ移住してきた。その半数近くが、ピオーネを栽培するために移住してきた。

宇治町にUターンした人（宇治町出身者で宇治町に戻ってきた人）やIターンした人（宇治町出身ではない、宇治町に移住した人）が、「UIクラブ」という親睦団体を組織している。この団体は宇治ふるさと物産祭りの後などに慰労会などを開催して、会員どうしが交流している。移住者が宇治町に引っ越してくるとき、「住むか暮らす会」や「UIクラブ」の会員が引っ越し作業を手伝う。移住者を選考し、移住や移住後の生活を支援する体制ができているために、宇治町では移住トラブルがこれまで起こっていない⁸⁾。

高齢者等が安心して生活できる生活基盤の整備は重要課題の1つであったが、これと関連する団体として、移送ボランティアや「宇治雑穀研究会」がある。

宇治町から成羽町や備中高梁駅までバスの便がある⁹⁾。しかし、高齢者の中には、自宅からバス停まで歩いて行けない高齢者がいる。そこで、2019年から、ボランティアの住民がガソリン代の実費をもらってそうした高齢者を、宇治町内の希望する場所へ自動車で移送することを始めた。2020年からは、福祉委員がボランティアの住民と高齢者を仲介して、移送サービスをおこなっている。

「宇治雑穀研究会」は、2012年に結成された。2020年現在、26人の会員がいる。平均年齢は70歳である。宇治町には多くの耕作放棄地があるが、宇治雑穀研究会は耕作放棄地を開墾し、もち麦を栽培している。もち麦栽培は、高齢者の生きがいづくり、耕作放棄地の解消、食育、地域活性化のために始まった。その後、2017年に研究会は一般社団法人となり、ビール麦を栽培し、地ビールを製造・販売するようになった。さらに、2019年から、宇治町宇治にあるもとの農協の事務所でカフェを毎週月曜日に開き、食事を提供している。

宇治町全体の住民を対象に、宇治カフェが宇治公民館で毎週木曜日に開かれる。定期的に脳トレ（脳をトレーニングするためのゲーム）や料理をするが、参加者が希望する活動（例えば、後期高齢者の女子会）もしている。町内単位では、ふれあいサロンがある。宇治町には30の町内があるが、そのうち15の町内でふれあいサロンが開かれている。高齢者などが集まってさまざまな活動をして、交流する。例えば、宇治町穴田の塩田では、ふれあいサロンの事業として、恵方巻を作って、高齢者の家に持ってゆき、安否確認をしている。社会福祉協議会はそれぞれのふれあいサロンの運営に最大で3万円の補助金を出し、支援している。

デイサービス（高齢者のための福祉サービス）の他に、宇治町ではミニ・デイサービスも開か

れている。ミニ・デイサービスはもともと介護認定を受けていない高齢者を対象に開かれたものであったが、現在は、介護認定を受けている一部の人も参加できる。宇治町では、月に1回、第4金曜日に宇治公民館で開いている。参加者は健康講話を聞いたり、ゲームをしたり、健康体操をしたりする。寿会というボランティア団体が宇治町にあり、ミニ・デイサービスの運営を支援している。その会員が自分で公民館に来ることができない高齢者を送迎したり、高齢者に提供する料理を作ったりしている。

5. 農 業

宇治町では高齢化が進んでいるので、耕作できない田畑が多い。耕作放棄地では雑草が生え、その種子が周囲に飛び、近所の農家に迷惑をかけてしまう。また、集落が中山間地域等直接支払制度の協定を結んで交付金を受けている場合、5年間は耕作をやめることができない。耕作をやめると、交付金を返還しなければならないからである。宇治町には、耕作できなくなった田畑の耕作を請け負う営農組合がないが、耕作できなくなった水田を借りて耕作してくれる農民が3人ほどいる。皆60歳くらいである。水田を耕作できなくなった高齢者は水田をそうした農民にほとんど無償で貸して、耕作してもらっている¹⁰⁾。

稲作をしている農民が稲刈りや脱穀の作業を他の農民に依頼することもある。コンバイン（稲刈りの機械）は高価である。そこで、一部の農民はその機械を所有しないで、業者や機械を所有する農民に稲の刈り取りから脱穀までをやってもらっている。

6. 塩田の「渡り拍子」の祭り

宇治町穴田の塩田では「渡り拍子」の祭りが一時途絶えてしまったが、住民はその祭りを1986年頃に復活させた。筆者は2016年11月3日に開かれたその祭りを見学に行った。踊り手、太鼓、鐘、子ども神輿からなる一行がそれぞれの家に行く。そして、家の前で、子どもたちが3つの太鼓をたたき、鐘を鳴らしながら、踊り手が踊る（写真5を参照）。踊りが終わると、各家で記念写真を撮影する。最後に、家の人がお礼のお金とお酒などを渡す。次にまわる家が近くにあると



写真5 宇治町穴田の塩田の「渡り拍子」

き、一行は歩いて移動する。しかし、次に行く家が離れているときは、軽トラックや車で踊り手、太鼓、鐘、子ども神輿を運ぶ。一行は6台の軽トラックや車でまわっていた。塩田は3つの地区からなっている。毎年、祭りの一行は1つの地区の家々だけをまわる。祭りの一行がまわる地区は持ち回りであるので、3年に1回、祭りの一行がまわる地区がまわってくる。祭りはすべての住民が参加しておこなう。塩田に移住して来た2家族も積極的に祭りに参加していた。さらに、宇治町から転出して岡山市に住む親子が祭りの日に来て、踊っていた。午後1時に一行が

家々をまわるのを終え、皆は塩田農村生活改善センターに集まり、食事をしたり、酒を飲んだりした。午後2時40分に神社に行き、神主2人と参加者が儀式を神社の中で執りおこない、その境内で渡り拍子を踊った。そして、子どもたちは子どもみこしを、大人たちは大型のみこしを担いだ。2つのみこしを神社前の丘の途中にある屋外の祭場に担いでゆき、祭場にみこしを置いた。そして、神主2人が儀式を執りおこなった。そのあと神社に戻り、餅まきをおこなった。

塩田では、男性は「塩田よろず会」に、女性は「あじさいの会」に加入している。塩田農村改善センターで出された食事を作ったのは、「あじさいの会」の女性たちである¹¹⁾。「塩田よろず会」の男性はすべて「渡り拍子保存会」にも入っている。

過疎化や高齢化が進行したので、地域のマンパワーがなくなっている。それに合わせて、自動車で楽器・人々・神輿を運ぶなど、祭りを簡略化させながらも、伝統的な祭りを維持している。

7. 「家」意識の変化

筆者は宇治町を含む高梁市の農村部で1997-98年に高齢女性に聞き取り調査をおこなった¹²⁾。当時と現在との大きな違いは、高齢者の間に「家」意識が現在ではなくなってしまったことである。

1997-98年当時、高梁市の農村部では子ども夫婦と同居する高齢者の世帯が多かった。表3は、65歳以上の高齢者のいる世帯について、その世帯構成がどのように推移したかを示している。「核家族以外の世帯」が、高齢者（夫婦）が子ども夫婦と同居している世帯にほぼ該当す

る。1995年に「核家族以外の世帯」は237世帯中の114世帯あり、その割合は48.1%であった。当時、子ども夫婦と同居する高齢者（夫婦）が比較的多かったが、高齢者（夫婦）と子ども夫婦は同居できるように、くふうもしていた。農家の敷地は広いので、子ども夫婦は両親と別棟に住んだり、味の好みが違うので、子ども夫婦は両親と食事を別々に作ったりしていた。2016年に話を聞いたある高齢女性によれば、1995年頃くらいまで、高齢者は長男が「家」を継ぐという考えを持っていたという¹³⁾。

しかし、現在では、高齢者は子どもの仕事や結婚のことを考えて、成人したら実家を離れて暮らすことを子どもに勧める。高梁市の宇治町の近くには条件のよい職場がないし、辺鄙な農山村には成人した子どもの配偶者が住みたがらないからである¹⁴⁾。さらに、成人した子ども夫婦は子どもの教育のことを考えて、宇治町の実家には居住したがる。宇治町の小学校では1学年の生徒の人数が2・3人ととても少ないので、生徒が他の生徒たちと十分に交流できない。これでは子どもの教育にはならないので、成人した子ども夫婦は宇治町の実家に住まないのである¹⁵⁾。こうしたことから、子ども夫婦に「家」を継がせるとい考え方が今では廃れてしまった。そして、子ども夫婦と同居する高齢者（夫婦）が少なくなった。表3によれば、2015年に「核家族以外の世帯」は191世帯中の48世帯であり、その割合は25.1%にまで低下した。

表3 宇治町で高齢者がいる世帯の世帯構成の推移
(単位：世帯)

年	核家族世帯	核家族以外の世帯	単独世帯	合計
1995年	88	114	35	237
2000年	88	109	45	242
2005年	100	88	50	238
2010年	101	66	53	221
2015年	95	48	48	191

(出典)国勢調査

(注)65歳以上の高齢者のいる世帯についての集計である。

子ども夫婦と同居していない高齢者（夫婦）がそのように増加しているので、住民が助け合って、安心して暮らせる仕組みを構築することが宇治町ではいっそう重要となっている。

8. ま と め

本稿の目的は、高梁市宇治町の運営方針の変更を説明し、住民の助け合いの事例を提示することであった。次の12点を明らかにした。

(1) 同町の人口は1955年に2,434人、1975年に1,272人、2015年に581人となった。このように、高度経済成長期の約20年間に人口が半減し、その後の40年間で更に人口が半減した。そして、高齢者の割合が2015年に50%を超えて、51.4%となった。

(2) 人口減少に伴って、商店を始めとする生活関連施設が無くなっていった。

(3) 同町にある縫製工場は、同町の女性に多くの就業機会を提供していた。

(4) 1990年代から、同町は都市との交流活動を中心に、地域振興をしてきた。ところが、過疎化や高齢化が進行したので、まちづくり推進委員会は宇治町の運営方針を2015年に変更した。そして、今後取り組むべき地域の重点課題を、①既存事業を見直し、住民の負担を減らす、②移住者を積極的に受け入れる、③現在住んでいる住民が安心して暮らせる仕組みを構築する、の3点とした。

(5) 重点課題を実現する宇治リスタート事業として、既存の行事の見直し、「全国雑煮サミット」や「宇治カフェ」の開催、電話帳の作成や防災キットの設置といったことをおこなった。

(6) 重点課題を達成するために、「住むか暮らす会」、「UIクラブ」、「宇治雑穀研究会」といった団体がある。また、行政も「宇治カフェ」や「ミニ・デイサービス」を開いたり、「ミニサロン」の運営を支援したりしている。

(7) 「住むか暮らす会」は市民センターとともに空き家の維持・管理をしたり、移住相談に応じたり、面接によって移住者を選考したりしている。そして、「UIクラブ」は移住者の親睦団体である。移住者が引っ越してくるとき、「住むか暮らす会」と「UIクラブ」の会員が引っ越しを手伝う。移住者を円滑に迎え入れる仕組みができているので、宇治町への移住者が多く、移住についての問題は起こっていない。

(8) 「宇治カフェ」、「ミニ・デイサービス」、「ふれあいサロン」が開かれており、住民はそうした場所で他の住民と交流できる。こうした場所は、とくに高齢者にとって重要である。さらに、ボランティアの住民が高齢者を自動車ですて町内の希望する場所に運ぶ「移送サービス」を始めた。こうした住民相互の助け合いで地域を住みやすくする仕組みが作られた。

(9) 高齢となって、水田を耕作できない農民が多い。そうした農民は自分の水田を耕作ができる他の農民にほとんど無償で貸して、耕作してもらっている。

(10) 宇治町穴田の塩田では、祭りのやり方を簡素化させながら、「渡り拍子」の祭りを維持している。

(11) 高齢者は「家」意識を1995年くらいまで持っていた。しかし、現在では子どもの結婚や仕事のことを考えて、高齢者は子どもが成人したら実家を離れて暮らすことを勧める。また、宇治町では小学校の生徒が少なすぎるので、成人した子ども夫婦は宇治町で両親と同居し、そこで子どもを学校に通わせようとしたがらない。こうした理由から、高齢者の間で「家」を継がせるという考え方が廃れてしまった。

(12) 宇治町では、「家」意識の消失とともに、子ども夫婦と同居していない高齢者（夫婦）が顕著に増加している。そこで、住民が助け合って、安心して暮らせる仕組みを構築することが重要となっている。

注

1. 宇治町の高齢女性NGさんによる2016年9月20日の話による。現在では、宇治地域市民センターの中に診療所があり、市立成羽病院の医師が月に2回派遣されて来て、2時間だけ簡単な診療をおこなっている。
2. 現在、宇治町の中学生はバスで他の地域の中学校に通学している。高梁市役所は、中学生が通学するためのバス代の90%を補助している。
3. 宇治町の高齢女性Kさんは、「近くの人ほとんどが縫製工場で働いた。それしか仕事なかった」と2017年5月24日に語っていた。
4. かんばら茶屋は2013年から閉店している。
5. 宇治公民館の職員NKさんは、2020年8月28日に「納涼祭をこのように簡素化したけれど、住民から不満は出ていない」と言っていた。
6. 家族が宇治町から転出しても、宇治町にある住宅をなかなか処分しない。家族は墓参りをするために宇治町へときどき戻ってくるが、そのときに住宅を使うためである。そのため、移住者が住宅を見つけることはそれほど簡単ではない。
7. 2年ほど前に、この施設の経営者が代わり、現在は研修生を受け入れていない。
8. 宇治地域市民センター職員であるNKさんが2020年2月27日にした話による。
9. 備中高梁駅と宇治町とを結ぶバスの便は平日に6便あり、土曜・日曜・祭日に3便ある。また、高梁市役所は、週に2日1便だけ宇治公民館と成羽町との間に生活福祉バスを運行している。
10. 宇治町の高齢女性NGさんが2016年10月25日にした話による。
11. 「あじさいの会」の女性は宇治小学校の運動会のときにも、参加者のために弁当を作る。ついでに、一人暮らしの高齢者のためにも弁当を作り、持ってゆく。一人暮らしの高齢者はわざわざ弁当を作ってまで運動会に行こうとしないからである。
12. 野邊政雄『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』2006. 御茶の水書房。
13. 2016年9月20日に、宇治町の高齢女性NGさんがそのように語った。
14. 岡山県庁職員Tさんによる2016年10月18日の話による。松原町の辺鄙な場所に住む高齢女性Aさんは2017年6月3日に次のように語っていた。「墓がある。あとを守らんと、子どもが帰ってくるところがない。(ここを守っていれば)子どもが帰ってきてくれる。ここを離れては暮らせない。ここなら、年金でなんとか暮らせる。(この家を出て都会で)家を借りたら家賃を払わないと生活ができない。自分は仕方がないからここにおる。子どもとの同居はできない。イノシシが出るようにところへはお嫁さんが来ない。ここら辺の人は、嫁さんと同居しようと考えていない。子どもにここに住んでもらうのは無理。ここに住むのは、自分でもさみしい。ここには、働くところがない。この家は(自分の代で)おしまい。イノシシがこのめぐりを歩くくらい(辺鄙である)。この辺の人は皆そういう考え。若い者と一緒に暮らすのはできない。静かでええとこなのになー。仕方がないから、ここでがんばるだけ。ここなら、することがある。」Aさんは、中山間地域の高齢者がなぜ成人した子ども夫婦と離れて住まざるをえないのかを端的に語っている。
15. 宇治町に住む壮年男性Kさんは、2016年11月23日にそのように語った。

[2020. 9. 17 受理]

コントリビューター：山内 廣隆 教授 (ビジネス心理学科)